

終戦となった八月十五日の朝は、雲一つなく晴れ上がって、ジリジリと照りつける太陽に、暑くなっていく今日を思わせていた。

私はこの一日より、園内作業による病室の付き添い看護に当たっていた。

二四時間というものを、病人と一つの部屋でベッドを並べて、寝起きも食事も共にしながら、病人の世話をするのであった。午前中は医師の診察があったり、看護婦さんによる包帯交換や注射などもあったが、その後は全て私たちの手に委ねられるのであった。病人もそれを納得し、看護をする者達も出来ることはするのが当然だという思いがあつて、さほど抵抗感もなく、看取りが続けられていた。

当時、病棟は治療棟に最も近く、幹線道路を隔てて七棟程が建てられていた。その中心あたりに、病棟監督室という建物があつて、監督さんと呼ばれる役職の方が三名程詰めておられ、夜間当直もされていた。

それというのも、病棟一切の事がこの監督室を通さなければ、医局への連絡もつかないし、その他のこまごまとした問題も処理出来ないからであった。

私が看護に当たっていた病棟は、女第一病室と呼ばれ、道路のすぐ西に建っていた。

玄関を入ると、左手がトイレ、真つすぐに通し廊下があつて、この廊下に沿って三つの大部屋と、緊急の場合は個室にでもなる部屋が一つがあり、廊下の中央あたりには共同のキッチンがあつた。

そして病室の窓の南側には、日よけを兼ねて藤棚が作られていた。

四月の終わりから五月にかけては、紫の長い藤房が垂れ、病棟一杯にとても良い香りを漂わせていた。

然し花の季節を過ぎてしまうと、外から見る病棟は薄暗く陰気な感じがした。

他の病棟も大体似たりよつたりの形式で、看護人は大部屋に一人ずついた。

この看護人達によって朝の掃除、洗面の用意、お茶配り、そして病棟の給食をしている小炊事場からの鐘を合図に、食事を取りに出掛ける。

ご飯は一人ずつ、丸い木の器か洗面器のような形をした入れ物に入っていたが、おかずのほうはひとまとめにされていて、それを一人ずつ分けてつけて回るのであった。

女一病室の場合は廊下でつながっているのですが、楽であったが、道路を隔てた東側の病棟は、雨の日は食事を運ぶのが大変であった。ただ病人の食器類を洗わなくてよいのでその点では助かった。水が今ほど十分でなくて、水道は一日に30分程しか出なかった。看護人の食事はちいちゃなお櫃に入ってきて来て、それを二人で分けて食べた。

園内の作業賃では、病棟の付き添い看護が一番手当が多く、十五日で一円ながしであったように思う。作業の期間は全て十五日と決まっていたが、時には続けて一か月をすることもあった。

交代する前には、病棟のガラスを全部拭き清め、外回りもきれいにしたものであった。今日の夕方には交代して部屋に帰れるという八月十五日、監督さんより

「一二時に監督室の前に集まるように、天皇陛下の大事な放送があるから、全員それを聞くように」との達しがあった。病棟の昼食は一時半ぐらいから出るのです、手早く済ませて一二時には監督室の前に私達は集まった。

不思議に今日は朝から空襲警報のサイレンが鳴らないなあとは思つたが、それがポツダム宣言受諾による敗戦であったとは思ひもしなかった。

監督室のスピーカーから流れる天皇陛下の玉音放送は、すごい雑音で、

陛下御自身のお声を聞くのも初めての事だったので、十分理解することはできなかつた。

戦争を終わらせ：国民のため：ポツダム宣言：などのお言葉がきれぎれに聞こえた。放送の後、皆は暑い盛りの中しばらく黙って立っていた。

やがて、誰か一人が「戦争が負けたってそんなこと信じられるか」と投げ付けるように言った。

それからみんな口々に「本土決戦に入るんだ」「敵をだますための放送だ」と言い出した。

女たちは一体これからどうなるんだろう、と不安そうにささやきあつた。

その中にいて一七歳の私は「ああ！今夜からもう空襲はないんだ、灯火管制もいらなんだ」
そして朝から敵機の音を聞かない空の平穏な静けさを思った。

まぶしい真夏の青い空を目を細めて見ながら、戦争に負けても終わったことがほっとした嬉しさであった。

しかし、戦争に負けた国が、どのような目に遭うのか、私達ハンセン病患者はどうなっていくのか、不安な思いもあったが、今日のこの青い空だけは忘れないでおこう、と思った。